

本山修験宗の 1992年度大峰奥駈南部修行について

小 田 匡 保

I. はじめに

聖護院門跡を本山とする本山修験宗では、1992(平成4)年10月2日(金)～6日(火)の4泊5日をかけて、前鬼口から熊野本宮まで歩く大峰奥駈^{おくがけ}南部修行を行なった。聖護院が南奥駈をするのは1977(昭和52)年以来15年ぶりであり、しかも前はNHKの新日本紀行の取材に協力する形であったため、純粹に修行として南奥駈をするのは久しぶりのことである。本稿は、この修行に参加した筆者の参与観察記であるが、本稿を執筆する目的は、大きく言って二つある。

ひとつは、修験道教団の大峰修行の状況を詳細に記録することである。地理学的観点から大峰の研究を進めている筆者にとって、通常の論文の内容はどうしても地表面に関するものに集中しがちであり、大峰修行の多様な側面は、ほとんど論文中に盛り込むことができない。盛り込むことができたとしても、リアリティのある記述をするほどのスペースはとれない。したがって、筆者が実際に大峰修行に参加して様々な経験をして、そのほとんどは論文構成から切り捨てざるを得ない。しかし、研究者であるか一般人であるかを問わず、ふだん修験道に関わりのない人々が、修験道に対して最も関心を持つのが、(地理学研究者としては残念ではあるが)まさにそのようにして切り捨てられる部分であることも事実である。修験道では山に入ってどのような修行をするのか、服装はどんな格好をするのかなどといった素朴な疑問にも、何らかの形で答えていかねばならないであろう。もっとも、このような素朴な疑問に対しては、いくつかのルポルタージュが既に出ており¹⁾、それらの欲求をある程度満たしている。本稿が屋上屋を架すきらいがない訳でもないのだが、しかし、同じ山を歩いていても教団・メンバーは違うし、毎年何が起こるか分からない。その意味において、本稿は本山修験宗の1992年度大峰修行の記録である。

二つめの目的は、大峰南部の状況を詳細に記録することである。地表面の地物にこだわる地理学研究者にとって、大峰のどこにどのような拝所があるのかといった客観的記述は、資料として貴重である。そのような情報は、上述のような大峰修行のルポルタージュからも得られるが、手薄であることが多い。特に大峰南部、とりわけ今回の入峰^{にゅうぶ}区間に含まれる前鬼～行仙岳間は、入峰修行する修験道教団もその機会も少なく、したがってその部分の報告も少ない²⁾。筆者が今回の修行に参加をしたのも、10年近くの自身の研究と6度の修行参加の中で、前鬼～

行仙岳間だけ（厳密には上葛川北西辺の一部と吹越以南も）が歩いておらず、何とかこの区間を踏破して、実際に自分の目で見てみたいとかねがね考えていたからである。本稿は、大峰南部の状況を、特に写真を多用して記述し、今後の研究の資料とすることを第二の目的としている。なお、あわせて、筆者の断片的考察も記しておいた。

Ⅱ. 京都～前鬼（第1日）

10月2日（金）早朝、7時前には筆者はドリーム号で京都駅に着いていた。京都駅近鉄口の集合完了予定時刻は8時30分である。駅内の喫茶店で朝食を済ませて待合室で時間待ちをしていたのだが、その時同じ場所で待っていて軽く挨拶を交わしたのが、後で助けていただくY氏であった。後から思えばこれも縁なのであろう。8時15分頃に集合場所に行くと、京都からの参加者はほとんど揃っていた。山伏の時間は定刻よりいつも早め早めで、これを「山伏タイム」と言うのだと、何年か前にある若い山伏さんに聞いたことがあるが、そのとおりである。参加費6万円を払い、受付を済ます。ワープロ打ちの「奥駈修行（前鬼以南）案内」と「参加者名簿」を受け取る。京都からの参加者は、15名（他に伴走車2名）であった。

8時45分発の橿原神宮前行き近鉄特急に乗車。橿原神宮前で9時45分発吉野行き特急に乗り換え、10時20分大和上市下車。ここで大阪・名古屋方面からの参加者も合わせ、29名全員（内女性3名、他に伴走車2名）が揃う³⁾。筆者は聖護院の大峰修行参加は5度めなので、顔見知りの人も何人かいる。10時30分貸切りバスで上市駅を出発。途中宮滝の「まつや」で早めの昼食をとる。国道169号線は、大台ヶ原へ分岐する手前で、道路工事のため通行時間制限をしており、12時10分に現場に行き当たったバスは、30分も停車を余儀なくされた。

1時22分バスは前鬼口に到着。いよいよこれから歩きである。幸い伴走車も到着し、荷物をほとんど車に預けてしまう（これは今回歩行距離が長いための配慮で、通常は荷物は全部自分で背負う）。前鬼口から前鬼山へは、ダム湖沿いの単調な林道が続く。顔見知りのK氏と世間話をしながら歩く。これまでこの道は2、3度歩いたことがあるが、いつも山を下りてきた時で、いよいよ山も終わりだなと思いながら歩いている。前鬼口の商店で久しぶりに女性に会ったということもあった。が、今度は逆で、これから山に登るのである。逆に歩いてみると、何度か歩いているはずの林道がかなり傾斜を持っている（上りになっている）ことに気づく。2時44分不動七重滝（写真1）が見える所で休憩。ここで、大きな濡れた荷物を背負った男の人が、下山してくるのに出会う。聖護院の本山衆と顔見知りのようで、話を聞いていると、洞川の人で、山上からずっと歩いてきたという。昨夜は、雨の中、釈迦ヶ岳の手前で野宿したという。山先達をやっている人かどうか聞きそこねたが、がっしりした体格の人だった。筆者も体が頑丈であれば、単独行で山の中を歩き回るのだが、膝の関節炎で足を引きずりながらも前鬼の下りで道に迷って遭難しかけた苦い経験があるだけに、単独行には自信がない。

3時3分不動七重滝を立ち、トンネルをくぐる。空の雲行きが少し怪しくなっている。
3時31分釣橋を渡る。この手前に左方へ延びる新しい林道ができていた。前鬼まで続くのだそうである。4年前ここに来た時はなかったものである。3時57分前鬼山小仲坊（写真2）へ到着。4年ぶりの前鬼は、別棟の宿泊所がきれいに建て直されていた（写真3）のが目についた⁴⁾。行者堂で勤行（写真4）の後、筆者はその新しい宿泊所に入ったが、畳も照明も新品で、汚れた格好で入るのが気がとがめるほどだった。

交替で入浴ということで、しばらく時間があつたので、筆者はひとりで周辺を歩いてみることにした。宿泊所を出ようとして目に入ったのが、前鬼名物のヤマビル（山蛭）（写真5）である。雨が降っていないので、それほど被害はなかったようだが、それでも筆者の知る範囲で2人ヤマビルに吸われた人がいた。ヤマビルに吸われたら、無理に引っ張らず、ポロッと落ちるまで血を吸わせておくのだそうだが、慣れないとそれほどの余裕もないだろう。筆者は幸いヤマビルには一度も吸われたことはないが、小さいときに用水路で蛭に吸われた時の痛さを思い出すと、落ち着いて蛭に血を吸わせてやる自信はない。

さて外に出て、小仲坊から南東方向に斜面の細道を下ってみた（写真6）。これは、牛抱坂（林道開通以前の交通路）に続く道ではないかと思うのだが、以前は草が生い茂っていてとても歩こうという状況ではなかった。今回きれいに草を刈ってあるのは、宿泊所の裏まで続く林道が下にできて、林道の脇に資材置場を作ったことと関係がありそうなのだが、筆者が気づいたのは、この細道の両脇が、今は木が生えているものの、かつて耕地だったらしいことである。それは、石積みによって何段も平坦面を作っていることで理解された。大正10年撮影という前鬼集落の遠景写真⁵⁾を見ると、家屋の斜面下方には、何段にもわたって耕地が続いている。最初その写真を見た時は、現在とのあまりの違いように、それが前鬼の写真であることが信じられなかったが、現在の前鬼は、当時の耕地・宅地のほとんどが山林化してしまっているのである⁶⁾。

もうひとつ筆者の気づいた点は、北西から南東方向にまっすぐな集落の主軸が走っていることである⁷⁾。上述の耕地の間を通る細道は、その上端の延長が現在の行者堂の正面に突き当たる（もっとも、行者堂の前には石塀がある）（写真7）。そして、その後方上方にまた同じ方向で道が続き、金輪王寺跡の正面に出る（写真8）。行者堂より上の宅地跡も周囲に木が生えて、石積みと平坦面のみがかつての姿を思い起こすようである（写真9）が、金輪王寺と行者堂を結ぶ直線を軸として、その両脇に五鬼の宅地が並ぶという往時の状況がしのばれた。前鬼歴代の当主の墓地には行けなかったが、聖護院の宮城泰年執事長によると谷を渡った所にあるそうで、何も字を刻んでいない自然石だという。

ひとりの巡検を終えて、あわただしく風呂に入る。前鬼はふだんは無住であり、風呂もないかもしれないと思っていたが、小仲坊の縁者の方が我々一行のために風呂を準備してくれていたのはうれしい。5時15分より、宿泊所で宮城氏から講話がある。明治期以降、大峰南部の修

行路復興に努めた林実利^{じつかが}行者、その弟子北原義定師、三井寺の中村鍵寿氏、奥駈葉衣会の前田勇一氏、氏の遺志を継いだ玉岡憲明氏をはじめとする新宮山彦ぐる一ぶなどについて説明があった。その後庫裡にて夕食。お膳につけられたビールは、宿泊所が完成したお祝いに小仲坊から出していただいたものという。食事をしながら、参加者31名の自己紹介があった。ちなみに、^{ぶちゆう}峰中での食事の前には、いつも全員で般若心経1巻を唱えることになっている。

食事の後、宿泊所で真新しい布団を広げる。入峰修行中の大部屋での雑魚寝は、いろいろな情報交換の場でもあり、端で聞いていてもけっこう勉強になる。前鬼の巻物に朱印を継ぎ足していくことが話題になっていた。巻物を持って来なかったら、半紙に朱印をもらって、後で自分で貼り合わせればよいとか。筆者は、昨夜夜行バスで眠れなかったこともあって、就寝時刻8時にもかかわらず、7時には眠ってしまった。

Ⅲ. 前鬼～行仙宿（第2日）

10月3日（土）第2日め。3時起床。夜中に二、三度目が覚めた時、雨が降っているような音が聞こえたが、外に出ると、オリオン座がよく見える。どうも脇を流れる沢の音だったようである。それにしても山で見る星はきれいである。いったん外に出した雨具をまた中にしまい、伴走車に預ける荷物を分ける。筆者の服装は普通の長袖シャツとズボンで、山伏の格好はしていないので、脱ぎ着するのは楽である。山伏の服装は、正式には鈴懸^{すずかけ}という浅黄色の装束だが、峰中では鈴懸の上部は脱ぐので、上半身は白衣の上に結袈裟^{ゆいげさ}、下は鈴懸の袴という格好である。その他に、腰に螺緒^{かいのお}（ロープ）と引敷^{ひっしき}（獣の皮、座った時に尻が汚れない）を結び、手足に手甲・脚絆を着け、さらに白の地下足袋を履くので、慣れないと、服装を整えるのに時間がかかる⁸⁾。3時30分朝食。3時50分行者堂に勤行。本山修験宗の勤行は、法螺で始まり⁹⁾、先達の声に続けて九條錫杖の冒頭の2節¹⁰⁾、般若心経1巻、諸真言¹¹⁾を唱え、本覚讃、法螺¹²⁾で終わるというのが基本的パターンである。

小仲坊の方々、伴走車の宮城氏に見送られて、暗闇の中、懐中電灯の明りを頼りに、4時に前鬼を出発する。先頭^{さきがけ}を行く先駈^{おおじゆく}は、大宿（リーダー）でもある喜蔵院の中井教善氏である。隊列の前の方は女性と足腰の弱い人と決まっており、順番を遠慮していると、あっという間に列の後尾の方になる。筆者は、大峰修行に参加すると、いつもたいてい後ろの方である。列の後ろは、遅れて拝所に着いたら勤行は既に終わり、休む間もなく出発ということがあるので、大変な点もあるのだが、また気楽な面もある。列の最後尾（後詰^{ごづめ}）は、本山衆が固めている。途中、隊列が途切れて、危うく違う方向に進みそうになる。夜の山道はこわいが、しかし先頭を行く先駈は、夜道でも間違えずに行ける経験と判断力を要求されるものだと感じる。

4時58分両童子岩に到着。勤行はなく小休止（～5時2分）。空が白んできて、谷の向かい側に千手岳が見える（太古辻からも見える）。懐中電灯を消してさらに登り続け、5時40分太

古辻に到着。これで大峰の尾根線に出た訳である（地図には蘇莫岳頂上に出るように道が記されているが、太古辻は大日岳と蘇莫岳の間の鞍部である）。健脚ばかりということもあるのだろうが、前鬼から1時間40分という非常に速いペースで、これは普通下る時間よりも速い。東の空から日が昇り、すっかり明るくなる。休憩の後、背比べ石（二つ石、摩33）に向かって勤行（写真10, 11）。背比べ石の前の古い石標には、「右 カサステ 左 ゼンキ」と刻まれていた。

6時7分太古辻を出発。いよいよ筆者にとっては未踏の南奥駈道に入る。前方すぐ手前には、蘇莫岳（摩32）がなだらかな山容を見せている。6時16分蘇莫岳の頂上を通過する。仙人が舞いを舞った舞台石があるというが、確かにそれらしき石があった。ただ、他にも大きな岩がいくつか見える。6時38分石楠花岳を通過（写真12）。山名どおり、このあたり道の両脇に石楠花が群生している（写真13）。この付近は景色がよく、南は笠捨山がはるか遠くに見え、北は見慣れた孔雀岳、釈迦ヶ岳、大日岳が、また違った角度からその姿を現わしている（写真14）。三角点のある天狗山で隊列調整を行ない（6時55分～7時）、7時15分奥守岳（摩27）に到着、勤行。

7時30分奥守岳を出発。滑る坂道を下って7時47分嫁越峠（写真15）を通過。女人禁制だった頃、ここだけは嫁入りのために女性が通れたという所だが、それを偲ぶ物も時間もなく、ただ道標があるだけであった。ここから笹の茂った急な上りを行くと、8時にピークに出る。そのすぐ後小さな湿地があり、ひょっとしてこれが小池宿かと思い、西行の歌¹³⁾を思い出しながら急いでカメラのシャッターを切ったが、山を下りて以前の自分の比定地¹⁴⁾と比べてみると、残念ながら違う場所であった。8時6分地藏岳（子守岳、摩26）到着、勤行。ここも三角点のある所である。

このあたりからも南の笠捨山の方がよく見える（写真16）。笠捨山は、鍋を伏せたような独特の形をしている。道の脇には、時折「第何次刈峰行」と記した新宮山彦ぐる一ふの刈り分けを記念する杭があり、南奥駈道であることを示す道標ともなっている（写真17）。

8時31分「般若岳」（摩25）の右（西）を巻く。頂上の南に出て後ろを振り返ると、大きな岩が目に入る。8時45分「滝川の辻」の道標がある所を過ぎる（写真18）。滝川辻と嫁越峠は同じ場所のはずなのに、なぜここが滝川辻なのだろうと疑問に思って地図をよく見ると、どうも2万5千分の1地形図にもある花瀬に下る道の分岐点のようであった。確かに、吉岡章氏の登山地図¹⁵⁾でもこの付近を「滝川辻」としており、仲西政一郎氏の登山地図¹⁶⁾にある滝川辻＝嫁越峠から、滝川辻の位置が移動したようである。そして、仲西氏の地図ではここが般若岳になっており、先ほどの「般若岳」の道標地点は、地形図の1,328m標高点付近の小ピークと思われる（吉岡氏の地図では、仲西説と1,328m標高点の中間地点に般若岳を記入している）。

「滝川の辻」から坂を下って、9時5分鞍部にある剣光門に到着、勤行。さらに、北の方に向かって個人個人で拝み返しをする。ここで弁当の半分を食べる。実際門があったのかどうか分からないが、ちょっとした平坦地が広がっており（写真19）、木の根元に「□（剣？）光童子」と刻まれた小さな丸石が祀られている（写真20, 21）。

9時40分剣光門を出発し、10時3分に涅槃岳（摩24）の頂上。10時26分には証誠無漏岳に着く。この山の上りは、両脇の笹が背丈ほども生えていて、笹の下をくぐるような感じで頭を下げて登っていく。新宮山彦ぐる一歩の刈り分けがなかった頃は、南奥駈道の至る所で、このように笹が生い茂っていたのであろう。証誠無漏岳からの下りでは、10分くらい渋滞する。何があるのかと思っていると、特徴的な岩から鎖を伝って下に下りる険路であった（写真22）。「トサカ尾」との表示板があり、確かに言われてみれば、鶏のとさかのように見える。ここを下ってほっとする間もなく、直後にまた鎖の上りが続く。途中2分ほど隊列調整をはさんで、10時57分鞍部を通り、急な上りを登って、11時4分阿須迦利岳に到着。1037、1036という東側の池郷国有林の林班番号表示がある。さらに長い急な下りの後、11時22分ようやく持経宿（摩22）に着き、勤行（写真23）。三角っぽい形をした自然石の「金剛童子」が祀られている（写真24）。

ここ持経宿には山小屋があり、その隣に不動堂もある（写真25）。この小屋は、奥駈葉衣会の故前田勇一氏が奔走尽力して建設にこぎつけたもの¹⁷⁾で、現在は新宮山彦ぐる一歩が管理にあたっているという。山小屋の向こうには林道が尾根に沿って走っており、里に下りたような気分になる。林道を南に100mほど行くと、道は左の池原方向と右の十津川村滝方向に分かれる。宮城氏の運転する伴走車が到着したばかりで、接待の飲物をいただき、弁当の残りを食べる。水場が山小屋から10分ほど林道を北に下った右カーブの所にあるそうで、水を汲みに行った人が多かったが、筆者は、前鬼で入れたお茶がまだポリタンクに半分近く残っており、右足が痛みだしていたこともあって、すわり込んでいた。中井氏が「こんなものがくっついていた」と言って、ダニを見せてくれた。5mmくらいの一見クモにも見える虫で、見るのは初めてである。幸い血は吸われなかったとのことだが、先駈はこういう虫の被害に遭いやすいという点でも大変である。

ところで、持経宿の位置は、現在の2万5千分の1地形図や仲西氏の登山地図によると、林道が尾根を切り通している所からさらに南の1,081m標高点になっている。小屋は1979（昭和54）年にできたものだから、本来の位置とは違う所に持経宿小屋を建てたのかとも思ったが、1976（昭和51）年の記録¹⁸⁾では、林道のそばの現在地に金剛童子の石がある（もっとも、金剛童子の石は小さいからすぐ移動でき、持経宿の位置の決め手にはならないのだが）。古い5万分の1地形図に記されている持経宿は、ピークよりも鞍部を指しているように読めるから、現在的小屋のある所をほぼ本来の持経宿の位置と見てよいのであろう。

さて、伴走車から今晚必要な荷物を受け取り、背中の荷が重くなったところで、12時15分持経宿の林道分岐点を出発。十津川方向に林道を10mばかり行って、左上の旧道に戻る（写真26）。登り口に、「10月3日（本日）行仙宿小屋は聖護院の奥駈修行で宿泊するため、登山者は他の小屋を利用してほしい」旨の新宮山彦ぐる一歩のメッセージがある。ピークを三つ越えた後（10時41分、48分、50分）、少し下って1時1分平地宿（摩21）に着く。道の左側のちょっとした平坦地に、トタン葺のこざっぱりした小屋があり（写真27）、空地の向かいには簡易ト

イレもある。話によると、以前の小屋がかなり傷んでいたのを、新宮山彦ぐる一ぶが、行仙宿小屋を建てた後改修したという。西に200m下りて水場との表示板がある。地図に出ている平治宿（平地宿）は北に位置しすぎているとの指摘がある¹⁹⁾が、所要時間から考えると、たぶんそうだろう。

1時21分平地宿を出発。また登って、1時42分転法輪岳着、勤行。三角点がある。頂上には大きな岩があり（写真28）、そのことは何かで読んで知っていたが、実際自分の目で見て、これが、あの『山家集』²⁰⁾に出てくる「釈迦の説法の座のいし」かと、ひとり感慨にふけた。しかし、西行のように悟りを得られないまま、1時56分転法輪岳を立ち、2時24～26分俱利伽羅岳。ゆるやかなアップダウンが続く尾根を南に進む。右足の痛みがだんだんひどくなり、下りがこたえる。3時8～30分東南東に尾根が振っている所の鞍部で小休。隊列の前後がかなり離れてくる。この手前で、65歳のO氏が、心臓が苦しくて動けなくなる。参加者のひとりから心臓の薬をもらい、後詰が付き添って後からついてくるとのこと。修行最後の夜の宴席で、参加者を代表してO氏は、この時「昇天した」と挨拶された。

3時51分怒田宿（摩20）に到着、勤行。高さ30cmくらいの「金剛童子」の丸石が、大木の根元に置かれている（写真29, 30）。かつては、小屋に使っていた木が残っていたそうだが、今は平坦地が広がるだけである（写真31）。この手前でも、東京からやって来た青年が、気分が悪いと動けなくなり、しばらく待ったが、後詰に任せることにする。怒田宿の位置は、既にある指摘²¹⁾のように、地図上では鞍部北寄りになっているが、それよりも行仙岳の登りにかかっているような気がする。

4時27分怒田宿を出発。前方に大きく見える行仙岳（摩19）の頂上には登らず、途中で左への巻道に入る（4時36分）。この巻道は、アップダウンがないかわりに、あまり踏まれておらず、斜面で滑りやすく歩きにくい。4時45分、頂上から下ってくる道と、左後方から上ってくる道とに合流する。左に下れば、おそらく白谷トンネルを通る国道425号に出るのだろう。

5時3分、少し薄暗くなってきた頃に、今日の宿泊地である行仙宿に到着。行者堂に勤行。ここには、新宮山彦ぐる一ぶによって、2年前に山小屋と行者堂が建てられており²²⁾（写真32）、今回南部奥駈修行ができるのも、この小屋が作られたことが大きいという。水場も10分ほど下りた所にあるという。小屋は、従来佐田辻と呼ばれていた三叉路の北東側にあるが、近世の行仙宿の位置がここかどうかは定かではない。行者堂の中に祀られているのは、役行者と林実利行者である（写真33）。新宮山彦ぐる一ぶの5人の方が炊出しに来ておられ、早速コーヒを接待された。一行が小屋に入った後、遅れた2人を含めた最後尾も無事到着した。

小屋の中は当然電気はなく、ランプの明りが頼りである。新宮山彦ぐる一ぶの方たちから、山中とは思えない豪華な食事を出され、酒・蜜柑までついていて、奥駈参加者一同から感激の声が挙がった。自分の分も含めれば約40人分の食料と水を担ぎ上げるのは、並み大抵のことではないだろう。夕食の前に、山彦ぐる一ぶの代表玉岡憲明氏から挨拶があり、1974（昭和49）

年に「ぐる一ふ」が設立されたこと、1984（昭和59）年より刈峰行を始めたこと、会則などはなくただ山が好きな者が集まったグループであること、南奥駈の道をひとりでも多くの人に歩いてほしいこと、里でお世話になる山伏の方にも気持ちよく歩いてほしいこと、そのために道や小屋の整備に努めていることなどが述べられた。大宿の中井氏からお礼の挨拶があり、山伏に期待されているものを里に下りて果たさねばならないとの言葉があった。

食事の後、我々参加者は毛布や寝袋を広げて（人数が多く、広げるほどのスペースはないのだが）身の回りの整理をしていた（写真34）が、山彦ぐる一ふの皆さんは後かたづけや翌日の準備で忙しそうにしておられた。参加者の中に、水を上げるのを手伝わせてほしいと、容器を持って水場まで行って来られた方がいらっしゃったが、なかなか真似のできないことである。筆者は、できかけた足のマメの部分にテープを巻いて応急処置をしたものの、昼間から続く右足脛裏の筋の痛みはひかないまま、最後まで歩けるだろうかと不安な気持ちのまま眠りに入った。

IV. 行仙宿～玉置山（第3日）

10月4日（日）第3日め。4時起床。昨日同様あわただしく食事を済ませ、行者堂に出立の勤行。新宮山彦ぐる一ふの方々に各自世話になったお礼を述べつつ、5時6分出発。3分歩いてすぐから池の標石が左にあるが、まだ薄暗くてよく分からない。5時11分、送電線の鉄塔を右に見る。この辺から歩きにくい下りで、右足が相変わらず痛む。5時18分鞍部。1985年にここを通った時には、笠捨山の巻道がここから右へ分岐していた（と野帳に記録してある）が、今回は気づかずに通り過ぎる。5時21分、「大峰八大金剛童子」の新しい角石あり。これより数ヵ所のピークを通過するが、いずれも笠捨山の前山で、なかなか笠捨山自体の上りにかからない。6時3分1,246mのピーク。6時9分、これも新しい「南無八大童子」と刻まれた石（写真35）。笠捨山南東の特徴ある支脈が、朝日を浴びてよく見える。6時12分鞍部。いよいよこれから笠捨山の上りである。この上りは、両脇の笹が背丈を越して、笹のトンネルを抜けていくような感じである（写真36）。傾斜も次第にきつくなる。山頂近くで南東方向からの道と合流し、6時36分ようやく笠捨山（摩18）頂上に到着する。勤行。三角点標石、修験寺院の碑伝、登山記念の名板にまじって、戦後に建てられた「金剛童子」の小さな角石がひっそりとある（写真37）。筆者の右足の痛みは笠捨山の上りでまたひどくなり、痛さで膝を曲げることができない。見かねたU氏が消炎スプレーを借りてきてくれたが、いっこうに効きそうにない。今日玉置山まで歩けるだろうか、途中で上葛川に下りなければならないかと悲壮な気持ちになる。

小休後笠捨山を出発（出発時刻記録なし）。ここからの下りは、足の痛みで一歩歩くごとに死ぬような思いである。本隊はずっと先に行ってしまう、筆者の後ろは後詰の人だけである。後詰を歩いていたY氏が、「膝の前が痛いのか、後ろが痛いのか。後ろなら治る」²³⁾と、坂を下りきった所で、按摩治療をしてくれた。Y氏の話によると、汚れた血が足先から上に上がっ

て行かず、そのために筋が張って、膝が曲がらなくなるのだそうである。このまま放っておくと、左足に負担がかかり、左足まで傷めてしまうし、腰も悪くなるとのこと。ツボを押さえてもらったり、マッサージをしてもらったりの治療が終わった後、膝を曲げてみると、さっきの痛みが嘘のように軽くなっていた。まだ痛みは残るが、かなり楽に歩ける。うれしくなってスピードをあげて歩きだすと、Y氏を含めて荷物の多い後詰の人に、「ついていけない」とこぼされてしまった。

7時37分葛川辻、7時47分送電線の鉄塔を通過。8時3分、大きな岩に「槍ヶ嶽」の標石あり（写真38）。槍ヶ岳は第17の靡であるが、そのような名前の山は明治期以前にはなく、「槍ヶ宿」の名称が誤って伝わっているものと筆者は考えている。鎖場が数ヵ所あるような険路を通って、8時11分地蔵岳着、勤行。道は山頂を踏まず、その直下南側を巻くような格好になっており、それほど古くはない石像の地蔵が祀られている（写真39）。南に眺望が開け、鉄塔の立つ玉置山が遠くに見える。本隊は出たばかりとのことで、遅れを取り戻したとばかり後詰はここで休憩することにし、次の四阿宿で本山のM₂氏から「小田さん、30分も遅れていますよ。列の前に行って下さい」と注意されることになる。

8時36分地蔵岳を出発。8時46分左に分岐路を見送り、坂を上って8時57分四阿宿（靡16）に着。なだらかなピークである。本隊は待ちくたびれた様子で、大宿の中井氏からは体を気遣っていただいた。遅れそうな人を何人か思い浮かべたが、まさか筆者が遅れるとは思わなかったそうである。Y氏に再度足を診てもらい消炎スプレーをかけるが、完全には痛みはなくなり、多少足を引きずる状態である。いろいろ体に気を配ってくれるU氏の好意ありがたい。

全員揃った後、9時18分四阿宿を出る。T氏が杖を貸してくれたので、それを使う。杖は、上りの時は邪魔なのだが、坂を下る時は、体重を杖で支えられるので、滑りにくく楽である。9時24分「菊ヶ池」（靡15）、25分「拝返し」（靡14）（写真40）、33分「槍之宿跡」（鞍部か）と、道端に同種の標石が続く。いずれも標石・標板と若干の碑伝があるのみで、菊ヶ池といっても池らしきものはなく、平地がある訳でもない。この形の標石は、行仙宿小屋から玉置山の間にしばしば見られ、同じ建立者のものと考えられるが、奥駈道復興に熱心であり、玉置神社の宮司を務められていた上葛川の森下研二郎氏ではないかと思う。9時46分送電線鉄塔横を通過。直後の分岐を左へ上がって、9時52分「香精山」（靡13）の標石のあるピークに着く。今日歩いてきた笠捨山・地蔵岳・四阿宿方向が見渡せる。さらに進んで道は左右に分かれる。どちらを行ってもいいそうだが、左をとる。10時18分、これより右へ急傾斜の下りが続き、10時27分貝吹野に到着。「野」とは言っても、平坦地ではなく、斜面の途中に大きな岩のある所で、岩の下に「貝吹之野」の標石がある。さきほど右に分かれた道は、ここに出てくる。飴玉と水でごまかしてきたおなかに、ようやく弁当の半分を入れる。ここでは、地名のとおり、法螺師が岩を背にして法螺貝を吹く（写真41）。聖護院では初めての試みという。後で法螺師のK氏から、貝の音が他の場所に比べてよかったという話を聞いた。

10時58分貝吹野を立ち、さらに木立の間の斜面を下る。11時3分鞍部に下りきった所に、「金剛童子塔之谷」の標石と、左上葛川などの道標が建てられている（写真42）。以前ここを通った時は、ここから上葛川に下りたのであるが、今回はまっすぐ行き、また上りにかかる。11時41分左下に上葛川の人家が見える。小屋以外に人家を見るのは久しぶりである。西行は、吉野から上葛川付近まで大峰修行をしてきて、「あづまや」（四阿宿か）と「ふるや」（古屋宿）で、澄んだ心を保ち得ない不安な心情を歌に詠んでいる²⁴⁾が、このような里の景色を筆者自身が目にすると、西行がそのような心情になるのも分かるような気がする。11時45分右に森林公園への分岐路を見送り、11時47分古屋宿（摩12）着、勤行。道の途中の少しばかりの平地で（写真43）、ここも「古屋宿跡」の標石・標板と碑伝がなければ、知らずに通り過ぎてしまう所である。仲西氏の登山地図中の位置は、少し北に寄りすぎているように思われる。

12時2分古屋宿を出発し、12時11分如意宝珠岳（如意珠岳、摩11）に着。ピークである。「千眺之森」の標石も建てられている。仲西氏・吉岡氏の地図には「千本ノ森」とあるのだが、どちらが本来の伝承であろうか。ちょうど伴走車の宮城氏が、背負子に缶ジュースを背負って来られたところで、またも接待にあずかる。12時16分如意宝珠岳を立ち、12時26分岩ノ口に到着。大宿の中井氏から、これを「ぐものくち」と読むのだとの説明がある。標石には「蜘蛛の口」と刻まれている。ここは上葛川からの道と合流する所で、以前来た時は上葛川の民宿「うらしま」に一泊し、翌日ここに上がってきたのだった。三叉路の北西側に変わった形の岩があり、それが蜘蛛の口に見えるのであろうか（写真44）。弁当の残り半分をここで食べる。

1時2分岩ノ口を出発。1時6分右に地蔵らしき舟形の石仏がある。1時9分「稚児之森」の標石と何かの鉄塔のある所に到着、勤行。ここまでゆるやかな上りである。休まずに進むと、1時15分林道に飛び出す。1986（昭和61）年修正測量の2万5千分の1地形図にはまだ記入されておらず、1985年にここを通った時も、花折塚の近くまで行って林道に出た。最近つけられたばかりの林道のようなのである。伴走車に荷物を預け、1時24分出発。この林道をそのまま歩けば、今日の目的地玉置山の下まで行ってしまうのだが、1時29分再び左上の旧道に入る。日の当たらない尾根の左を巻いていくと、1時39分「水呑金剛」の標石が道の右脇にある。仲西氏・吉岡氏の地図にある横峰金剛であろう。1時50分また林道に出たと思ったら、1時53分旧道に、2時林道にと出入りを繰り返し、旧来の奥駈道が林道に寸断されている感じである。2時5分左の旧道に上がって、2時8分花折塚に着く（写真45）。勤行。大塔宮の側近片岡八郎が戦死した所との案内板があり、彼の塚と明治15年に建てられたという記念の碑とが並ぶ。

2時35分²⁵⁾花折塚を立ち、2時49分なぜか横峰金剛の標板があるのを通過して、2時52分林道に出る。右下遠くに十津川と折立集落が見える（写真46）のに感激し、奥駈修行が終わりに近いことを実感する（目指す熊野本宮は十津川の下流に位置する）。途中旧道が左に分かれているのを見送り、3時14分林道の分岐に到着、休憩。道の脇にわき水がある。3時25分玉置神社方向に車道を上り、3時30分駐車場の手前で左の玉置山頂への道に入る。3時45分鉄塔の

そびえる山頂に着き、地蔵に向かって勤行（写真47）。ここでも宮城氏から缶ジュースの接待がある。山頂からは熊野灘が望めるはずなのだが、あいにくかすんでいて見えない。休憩中、筆者が大学の事務職員に「奥駈とは山の中を走るのか。『駈』と書いてあるではないか」と聞かれた話が出て、一同におおいに受けた。しかし、大峰修行に多少の心得や知識のある人には常識のことであっても、一般の人にとっては理解しにくいものがあるのは当然とも言え、修験道の中の世界の人と外の世界の人とのギャップを示すエピソードではあろう。

4時5分山頂を出発し、南の玉置神社方向に向かって下る。マッサージをしてもらって足の調子がよくなったとはいえ、久しぶりのこの急な下りはちょっと苦しい。振り返ってみれば、この日の後半は、林道に出てからあまりアップダウンを感じない行程であった。4時15分三つ石社（写真48）とその下のお玉石（写真49）に着き、お玉石の前で勤行。さらに下って4時30分頃には玉置神社に到着し、勤行。玉置山から本宮まで参加する5名の人に迎えらる。大宿の中井氏から、玉置山が聖護院とつながりの深かったこと、明治維新の際に十津川村全域が神道化したこと、最近境内に建立されたばかりの大日堂にまつることなどの講話がある。駐車場の伴走車まで荷物を取りに行き、宿泊場所の社務所（写真50）に入った頃には、外は薄暗くなってきている。社務所は、もと高牟婁院の建物で、1745（延享2）年の建立という。1988（昭和63）年に重要文化財に指定された貴重な建築物で、寝場所の一部になっている書院の部屋には、色あせながらも品を感じさせる襖絵が描かれている。ちなみに筆者は、参籠所になっている地階の部屋に割り当てられた（懸造りになっているため、裏から見ると1階になる）。

5時45分夕食。食事などの世話をしてくれているのは、地元の方たちであろうか。玉置山～本宮参加者の方たちから、食料の接待を受ける。食事の席で、伴走車の宮城氏が、昨日浦向の旅館に飛び込みで泊まろうとしたところ断われかけたが、腕に数珠を巻いているのが旅館の人の目に入り、「お寺さんならお泊まり下さい」と泊めてもらったこと、大峰修行の話をする。「聖護院さんですか」と聞かれ、地元ではどこの山伏が来ても聖護院の山伏と思っていること（この背景には、聖護院が戦前に浦向から笠捨の方に入っていたことがある）などのエピソードが披露された。食事後、烏の行水ではあるが、2日ぶりに風呂にも入り、汗を流す。入浴後、布団の上でまたY氏に体の方々を調整してもらう。ありがたいことである。足のマメが大きくなり、テープをさらに巻く。脇では、大きなマメをつくって歩くのがつらそうだったO₂氏が、Y₂氏から切開の荒療治を受けている。8時前自分の部屋に戻ると、同室の人はほとんど寝ていた。8時就寝。

V. 玉置山～熊野～京都（第4～5日）

10月5日（月）第4日め。3時起床。3時30分朝食。大日堂に向かって勤行し、4時出発。4時25分林道に出、荷物を伴走車に預ける。木立を抜けたので空が視界に入るが、星が見えず、

天気は悪そうである。4時38分ここを立ち、すぐ右の旧道に入る。旧道といっても車が通れるくらいに拡幅してある。山の右腹を巻いていくと、4時58分道幅が細くなり旧道らしくなる。水呑金剛（水呑宿、摩9）への分岐が右にあるはずだが、気づかずに通り過ぎる²⁶⁾。次第に上りがきつくなり、「六根清浄、懺悔懺悔」のかけ声にも力が入る。5時25分古い石の道標の所で右に行く。5時28分尾根筋に出て、右にしばらく進むと、5時38分なぜか篠尾辻との道標がある。左右に道が分かれるが、右をとり、坂を上って、5時49分大森山の頂上に到着、勤行。かなり明るくなってきたが、日は射さず、雨の降りそうな気配である。

6時7分大森山を出発。6時19分大森山三角点を通過。ここからまた急な下りとなり、右足の痛い筆者は、本隊から遅れがちになる。6時58分左篠尾との道標があるが、ほとんど道らしきものは見えない。立木に他寺院の碑伝が打ってあるが、たぶんここが岸の宿（摩8）と考えられているのだろう。6時59分今度は右へ七色・切原への分岐があるが、これははっきり分かる道である。7時5分、8分、17分とピークを過ぎるうちに、少しずつ雨が降り出す。7時30分五大尊岳（摩7）に到着、勤行。山頂には近年の石の不動明王像が祀られている（写真51）。本隊から遅れてしまって、後詰だけの集団である。7時35分五大尊岳を出発。これから高度差400m近くの下りで、痛い足を引きずる身にはつらい。小雨が続いて坂が滑りやすくなり、何度か転ぶ。「金剛多和はまだか。遠いな」と思っているうちに、8時38分ようやく休止している本隊に合流。雨に耐えきれず、雨ガッパを着ける。筆者は登山用のセパレーツの雨具だが、山伏は普通裾の長い薄手の雨具で済ましている。考えてみれば、山伏の装束である鈴懸の袴の上からは、ズボン式の雨具は着けられない。頭にかぶる檜の笠が、こういう雨の時には役に立つ。最後尾を待って全員揃ったところで、8時50分出発。

電発作業道を右に2ヵ所見送って、9時10分鞍部の金剛多和（摩6）に到着、勤行。切原と篠尾を結ぶ道が交わっている所である。十字路の北西角に平坦地があり、役行者像が祀られている（写真52）。相変わらずの雨の中、9時15分金剛多和を出発（写真53）。最後の本格的な上りである。右大黒水との新宮山彦ぐる一ふの道標を見送って、9時34分大黒天神岳（大黒岳、摩5）頂上着、勤行。二等三角点がある。開いた野帳に遠慮なく雨粒が落ち、ボールペン書きのメモがうまくとれない。左の小井谷へ出る道を見やり、9時40分大黒天神岳を出発。9時55分530m地点と思われるピークを通過。10時1分、7分と送電線の鉄塔を見て、10時27分山在峠に到着。役行者像に勤行。ここは平坦地が広がっており、北側に役行者像の祠と護摩壇らしきもの（写真54）、下方の南側に宝篋印塔と石祠（写真55）がある。宝篋印塔には「享和三癸亥（1803年）正月」「華蔵禅寺現住□□敬白」「奉写大乘妙典一字一禮」「秋葉山大権現」「金毘羅大権現」などの字が刻まれており、修験道の入峰修行と直接の関係はないようである。脇に、1975（昭和50）年本宮町建立の「山在宝篋印塔」の碑もある。伴走車で到着したばかりの宮城氏から、地元の人々は宝篋印塔をなまって「奉経塔」と呼んでいること（道標にも奉経塔とある）、山在集落の中村利秋氏が大正・昭和初期に護摩の準備を整えられ、聖護院も戦前にここ

で護摩を焚いたことがあること、氏の死後地元でここの世話をする人がいなくなってしまったことなどの講話をうかがう。この後宮城氏から、暖かい缶飲料を接待される。雨で冷えた体に、暖かい飲物はうれしい。合羽のまま木陰にすわり込んで、空腹だったおなかにようやく昼食の弁当を入れる。相変わらず小雨が降っているの、弁当の中に時々雨垂れが落ちる。ちょっとわびしい感じだが、雨の中で立って弁当を食べなければならなかった時もあるそうだから、それに比べればマンだろう。

11時23分山在峠を出発。宝篋印塔のすぐ南側を舗装されていない林道が走っているが、これも1985年にはなかったものだ。林道を右に行って三叉路を左にとり、11時33分、林道左上の吹越宿（吹越山、摩4）に到着、勤行（写真56）。かなりの広さの平坦地があり、正面石積みの上の堂には役行者（右）と理源大師（左）が祀られている²⁷⁾。その左には、1975（昭和50）年本宮町建立の吹越宿の記念碑があり（聖護院門跡岩本光徹師の書になる）、手前に護摩壇らしき石が並べられている。以前来た時は、もっと森厳な霊域らしい雰囲気のところだったが、目の前に林道がついて明るくなり、厳かさが半減してしまったようだ。11時43分吹越宿を出発。林道を渡って向かい側に上り、旧道を行く。ここからは、筆者にとって初めての道である。ゆるやかなアップダウンの道を進むと三叉路に出て（右は下向橋）、これを左に行くと、12時16分右側に無給電中継所が見える。そこに上がって下を見おろすと、目指す本宮の旧社地がすぐそこである（写真57）。河原に、伴走車と玉置山からの参加者の車とが既に到着しているのが豆粒のように見え、法螺師が聞こえるかとばかりに法螺を吹く。応答の法螺の音が返ってきたので、歓声が挙がる。距離にして1.5kmくらいは、法螺の音は充分届くようだ。12時25分ここを立ち、12時36分車道に飛び出す。南に下って、12時40分鞍部の公園に着く。車道・公園とも2万5千分の1地形図には出ておらず、最近できたもののようだ。公園から坂道を上って、12時44分七越峰に到着。頂上は広場ようになっており、一角の地藏の石像に勤行。本山のM₂氏から、大峰の3玉石²⁸⁾のひとつが、排仏毀釈の際にここに転がっていたという伝承のあることが話される。雨があがり、合羽を脱ぐ。

1時26分七越峰を立ち、^{そなえざき}備崎の方に向かって下る。途中いったん車道を歩くが（1時34分～45分）、最後の山道を下って、2時5分とうとう備崎（十津川の河原、備崎橋の北）に出る。思わず歓声が挙がり、地下足袋（靴）のまま川を渡る（写真58）。渡り終わったところで、河原で記念写真撮影。それより列を整えて、行列隊形で本宮旧社地に向かう（写真59）。ボンデン（結袈裟の^{ふさ}総）の位の低い方が前で、大宿が後ろ、その後に結袈裟を着けていない者、一般参加者、女性²⁹⁾が続く。山中では歩きながら飛び交っていた会話もなくなり、皆黙々と旧社地に向かって歩いている。2時25分頃旧社地^{おおゆのはら}大斎原の石祠に勤行。ピンと張りつめた空気に、写真を撮るのがためられる。さらに行列隊形のまま、現在の本宮大社に向かう。これから先は何度も訪れて知っている所、今回の調査は旧社地で終わったという安心感から緊張の糸が切れたのか、筆者は、歩きながら、峰中での様々な出来事が次々と思い出されてきた。ありきた

りの表現をすれば、足を傷めながらも最後まで歩き通せた感慨ということになるのだろうが、「とにかく終わったなあ」という何か感傷的な気持ちに次第に襲われた。本宮大社の石段を上りながら、そして社前で勤行しながら、筆者自身の目に涙が浮かんでしようがなかったことを白状しなければならない。大峰修行には何度か参加したが、「感涙」なるものを経験したのはこれが初めてである。

本宮参拝を終え、3時30分貸切りバスにて本宮を出発（玉置山より参加の5名の方はここから帰京の由）。みんな山の中から出てきたばかりで、汚い格好をしているので、バスの座席を汚さないように、尻に敷くゴミ袋が配られる。4時40分勝浦温泉越之湯に到着。早速着替えて風呂に入る。今日峰中で転んだりした時にできた手や腕の引っかき傷の多さにびっくりする（手甲はやはり必要なものだと感じる）。湯が傷にしみるが、温泉の湯が傷に効くような気がする。湯ノ峰温泉で病を癒した小栗判官の話が思い出される。夕食の宴席では、大宿の中井氏、宮城氏などの挨拶があり、みんな無事に満行できたことが祝福される。筆者もお世話になった方々に挨拶をして回ったが、「命の恩人」のY氏は、「ひとにひとつ世話になったら10倍にして返したい。人間は10代前まで遡ればみんな血がつながっている。全然知らない人でも他人ではないのだ」とおっしゃっていた。氏は老人を連れてよくお四国（四国88ヵ所）に参りに行くのだそうだが、老人は体の調子を崩しやすいので、その面倒をみるため、ある先達から按摩の仕方を習ったのだという。

翌10月6日（火）第5日め最終日。7時30分朝食。8時30分出発。ホテル越之湯玄関で出立の勤行。9時頃那智山到着。那智大社・青岸渡寺・飛滝神社で勤行。10時30分那智山を出発。11時5分新宮速玉大社着、勤行。以上で熊野三山もめぐって、勤行すべき所は終わり、バスで帰路につく。途中鬼ヶ城で昼食休憩。松阪市で大阪・名古屋方面の人が下車し、バスの人員は半分くらいになる。7時15分京都の聖護院門跡に帰門した時には、すっかり夜になっていた。

東京に帰り平常の生活に戻っても、足の痛みは、その後半月ばかりは消えなかった。11月中旬、聖護院より修行満行の入峰證書と記念バッジ（「南部奥駈」の字の入った特製のもの）が送られてきた。備崎で撮った全員の記念写真は、残念ながら写っていなかったとのことであった。

VI. おわりに

冒頭で述べた本稿の意図、すなわち大峰修行の状況と大峰南部の状況とを記録するという目的は、以上の記述でほぼ果たせたものと思う。本稿は、課題を設定しそれを解明するというスタイルの論文ではなく、今後の研究の資料を記録にとどめておくことをねらったものである。

最後に、大峰修行の心理なるものについて、筆者の体験を記しておきたい。大峰修行では「つらい経験をした人ほどいい行をしている」とはよく言われることだが、その時の心の持ちようが実際どうなのかは、本山修験宗教務部長の岡本孝道氏（伽耶院）が実感を込めて書かれ

ている。「大峯の修行とはどんなことをするのかと申しますと、(中略)要するにただ歩くだけなんです。(中略)足を痛め、体力を使い尽し、ただ気力だけで死物狂いに歩いている時には、(中略)どうぞ助けて下さい、どうぞ歩かせて下さい、ただそれだけなんです。(中略)一心に仏を求めるといのはこういう時のことを言うのでしょうか」³⁰⁾。筆者は岡本氏ほどのつらい経験はしていないけれども、以前にひとりで大峰を歩いていて膝が関節炎になり、遭難しかけた時、やはり「何とか最後まで無事に歩かせて下さい」と、役行者の加護を念じずにはいられなかった。今回は足を傷めたといっても、集団で歩いているという安心感があるだけ切実さが違うが、しかし役行者の宝号を唱える時には助けを願って、声にも力が入った。最後に思いがけず感涙まで体験して、筆者は今回の調査で、かなり修行の世界に入り込んでしまったようである。本山の宮城氏からは、「『学者先生修行する』ですな」との言葉を頂戴した。

もっとも、このような心境になる人、時は限られており、上述の岡本氏も、何度という大峰修行の中でこのような経験は一度だけだという。体を傷めさえしなければ、しかも何度も参加していれば、大峰修行は端で思うほど大変なものではなく³¹⁾、実際登山者も同じ道を歩いている。また、上記のような一種の極限状態は結果的になるものであって、これが目的で参加をする訳でもなかろう。奥駈に参加する理由はいろいろであり、山に登るのが好きだから来る人もいるし、先達号などの資格を考えて参加する人もいる。あるいは、霊的な力を身につけようとする人もいるが、帰路バスで隣合わせた某氏は、「自分が法力を使うのではなく、神が自分の体を通じて法力を顕わすのだ。奥駈修行をするのは、その力が常に充分に顕れるような体の状態にするためだ」と言う。筆者は、調査ということを抜きにして、また参加してみたい魅力を奥駈に感じている。

こうして大峰奥駈修行を細かく振り返ると、いろいろな方にお世話になったことが思い出される。末筆ではあるが、それらの方々に、あらためてこの場を借りてお礼を申し上げたい。なお、文中の麁の名称と番号は、参加時に配られた冊子「奥駈修行(前鬼以南)案内」によった。出発・到着の時刻は筆者のものであり、通常先頭はこれより数分早い。

注

- 1) ①五来重(文)・井上博道(写真)『山の宗教——修験道』、淡交社、1970、153—221頁、②宮坂敏和「修験の山吉野熊野(三)」、奈良文化女子短期大学紀要7、1976、101—119頁(宮坂敏和『吉野——その歴史と伝承』、名著出版、1990に所収)、③鈴木正崇「大峯山の峰入りと灌頂」(宮家準編『山の祭りと芸能(上)』、平河出版社、1984)42—63頁(鈴木正崇『山と神と人——山岳信仰と修験道の世界(日本文化のこころ その内と外シリーズ)』、淡交社、1991に所収)、④前田良一『大峯山秘録——花の果てを縦走する』、大阪書籍、1985、11—108頁、⑤長野覺「大峯山奥駈体験記」、宗教と現代1987年8月号(特集:大峯山寺・昭和大修理落慶)、1987、20—28頁、補筆したものは同「大峯奥駈修行記」(田邊三郎助編『図説日本の仏教6 神仏習合と修験』、新潮社、1989)319—326頁、⑥久保田展弘『修験道・実践宗教の世界』、新潮社、1988、51—84頁、⑦横山真佳「山伏行者苦行記」(毎日新聞社編『宗教は心を満たすか2』、毎日新聞社、1989)79—117頁など。以上の他、修験道教団機関誌類に、信徒の大峰修行参加記がしばしば掲載されており、筆者もある

寺院の機関紙に修行参加記を書いたことがある。⑧小田匡保「第40回大峰奥駈修行記——山上ヶ岳～弥山～前鬼」, 行者新聞23号(竹林院), 1987, 4面。なお, 写真類としては, ①の他, ⑨矢野建彦(写真)・宮家準(文)『日本の聖域8 修験の道場・大峰山』, 佼成出版社, 1982(矢野・宮家・岡倉『聖地への旅——大峰山(フォト・マンダラシリーズ)』, 佼成出版社, 1987にはほぼ同じ構成で所収)が豊富である。

- 2) 前掲注1)の文献に含まれるもの以外に, 修験者による大峰南部の記録として, ①宮城泰年「前鬼以南縦走記」, 本山修験54, 1977, 6—12頁は, 靡の描写が詳細である。他に, ②宮城泰年「旧靡道修行記——大峰山脈南部を縦走して」, 修験19, 1959, 10—19頁, ③宮城泰年「南奥駈, 地藏岳を中心としての参加記」, 本山修験45, 1975, 53—55頁, ④宮城泰年「南部奥駈修行をふり返って」, 本山修験56, 1977, 8—13頁, ⑤福井良盈『大峯山奥駈案内記』, 竹林院, 1970頃, ⑥福井良盈「大峯奥駈行場と入峰行」(五来重編『山岳宗教史研究叢書11近畿霊山と修験道』, 名著出版, 1978)196—224頁。修験者の記録を補うものとして登山家の登山記録が挙げられる。戦後の大峰南部の文献・地図としては, ⑦仲西政一郎『玉置山・瀨八丁(山と高原地図65)』, 昭文社, 1984(9刷)は, 登山道・地名が詳細であり, ⑧吉岡章『大峰山脈(山と高原地図56)』, 昭文社, 1990に受け継がれている。他に⑨仲西政一郎『大峯の山と谷』朋文堂, 1957。登山家ではないが, ⑩柞木田龍善『修験の山々』, 法蔵館, 1980, 137—196頁は, 1961(昭和36)年に大峰を個人的に縦走した貴重な記録で, 観察が細かい。大峰南部の写真類は上記文献に含まれるもの程度であるが, ⑪鈴木義之(写真)「木と石と水と空気の世界——大峰〈靡〉より」, あるくみるきく254(特集:大峰の靡), 1988, 4—29頁は, 大峰北部の靡に焦点を絞った価値あるものである。
- 3) 31名の年齢別内訳は, 参加者名簿によると, 10代1人, 20代1人, 30代10人, 40代10人, 50代2人, 60代4人, 70代1人, 不明2人である。今回の南奥駈は, 通常の奥駈に比べて一日の歩行距離が長く, 参加者を健脚の人に限ったためか, 平均年齢はいつもより若くなっている。
- 4) 1988(昭和63)年9月に前鬼を訪れた時, 以前の宿泊所には3枚の古い碑伝が打たれていた(碑伝とは, 修験者が拝所に納めていく木の板である)。今回見かけなかったのも, どこかに保存してあるのかもしれないが, この場を借りて, その文面を記しておく。①「(祈願文)奉奥駈修行深山灌頂者二山大先達慶雅敬白/明治廿^(カ)七年/九月三日/田中信行/北原義定」。②「(祈願文)奉供□大峯釈迦嶽前鬼山三十三度二世安楽^(カ)/兵庫県下淡路国三原郡福良浦講中/十三年六月登山旧泰寶院主職小池文了坊/石垣辨吉/石濱長蔵^(カ)/岩川富蔵」。③「奉修大佛頂金輪王供一千座一天泰平佛日光輝法輪常転門流繁栄諸法成就祈/大峰中台深山 瑜伽場/大阿闍梨 慈愍」。①は, 十津川村上葛川の森下家に所蔵されている明治27年9月の碑伝と同一メンバーであり, 同じ奥駈の際のものであろう。なお, 森下家所蔵の碑伝ならびに北原義定に関しては, ④小田匡保「上葛川森下家所蔵の碑伝について——明治期における大峰入峰の一史料として」, 本山修験98, 1988, 30—35頁を参照されたい。
- 5) ①慶応義塾大学宮家研究室「大峯山中の前鬼とその行場」, あしなか170, 1981, 15頁。②宮家準『大峰修験道の研究』, 佼成出版社, 1988, 439頁。
- 6) 吉野山における耕地の山林化については, 拙稿で論じたことがある。小田匡保「吉野山における農業的土地利用とその変化」, 駒沢地理28, 1992, 45—74頁。
- 7) 前掲注5) ①15頁, ②439頁の前鬼略地図では, この感じがあまり出ていない。
- 8) 以上の他に念珠を必ず身につけており(手に巻いている), 頭に頭巾をつけ, 杖と笠を持つ。法螺を持つのは数人の法螺師のみである。錫杖は, 修験道宗派によって違うが, 本山修験宗は峰中では所持していなかった。
- 9) 正式には, この前に三礼「一心頂礼本尊諸尊一切三宝」がある。法螺師は法螺を吹く前に, 貝の口を掌で3回たたき, 「三味法螺声 一乗妙法説 経耳滅煩惱 当入阿字門」と唱える。
- 10) 「手執錫杖 当願衆生」との先達の声に続いて「設大施会 示如実道 供養三宝 設大施会 示如実道 供養三宝」と唱え, また「以清浄心 供養三宝」の声に続いて「発清浄心 供養三宝 願

清浄心 供養三宝」と唱える。

- 11) 真言の種類は、拝所により多少違う。基本的には3度繰り返すが、高祖宝号「南無神変大菩薩」は詠む回数が多い。
- 12) 正式には、この後に三礼がある。前掲注9)を参照のこと。
- 13) 『山家集』下・雑に「いかにして こずゑのひまをも もとめえて こいけにこよひ 月のすむらん」とある。
- 14) 小田匡保『『山家集』に見る山岳聖域大峰の構造』、史林70—3, 1987, 138—139頁。
- 15) 前掲注2) ⑧。
- 16) 前掲注2) ⑦。
- 17) 宮城泰年「大峰持経宿再建を祝って」、本山修験64, 1979, 6—8頁に関連記事がある。
- 18) 前掲注2) ①8頁。
- 19) 前掲注2) ①8頁。なお、前掲注2) ②14頁によると、もとの平地宿小屋は、1955(昭和30)年に三井寺修験によって建てられたものである。
- 20) 『山家集』下・雑に「天ほうれんのたけと申所にて、釈迦の説法の座のいしと申す所をがみて」との詞書のもとに、「こゝこそは のりとかれける 所よと きくさとりをも えつるけふ哉」の歌がある。
- 21) 前掲注2) ①9頁。
- 22) 1990(平成2)年7月1日に、山小屋・行者堂完成に際しての開眼法要と採燈大護摩供が行なわれている。宮城泰年「修験道を支える人たち——大峰山脈佐田の辻行者堂開眼法要にて」、本山修験106, 1990, 13—17頁。
- 23) 膝の前が痛いというのは、関節炎のことと思う。これは、関節を使わず、安静にしておくしかない。
- 24) 一首のみ挙げると、『山家集』下・雑に「ふるやと申すくにて／神無月 しぐれふるやに すむ月 は くもらぬかげも たのまれぬ哉」とある。
- 25) 次の地点への距離からすると、もっと出発時刻が遅かったかもしれないが、野帳の記録のまま記しておく。ちなみに、前回は林道まで8分で出ている。
- 26) 前掲注2) ⑦20頁によると、水呑金剛は1961(昭和36)年に三井寺の中村鍵寿氏によって建立されたものというが、ここは本来の水呑宿の位置とは思われない。宮城氏によると、「この場所をどうやって見つけられたのか」との氏の問に、中村氏は「拝んだんだよ(占った)」と答えられたという。
- 27) この地には昔から両尊を祀った小宇があったそうだが、昭和30～40年代に盗難等のため形をとどめなくなったので、1973(昭和48)年に役行者像を安置して開眼法要を行ない、さらに翌1974(昭和49)年に理源大師像の開眼供養をしている。また同時に、「聖護院越え」と呼ばれる吹越宿から備崎への道の修行も行なっている。田中祥雲「奥駈修行入峰記」、本山修験42, 1973, 21—26頁。草分頭岳「吹越修行記」、本山修験45, 1975, 51—52頁。
- 28) 大峰の3玉石は、山上、玉置山、それに吹越にあったという。
- 29) 結袈裟を着けていないとはいえ、それなりのきちんとした格好をした3人の女性が、(筆者より後ろの)最後尾だったことは、修験道と女性の関係の問題を少し考えさせられる。
- 30) 岡本孝道「修行の体験を今日に生かす」、山岳修験6, 1990, 62—65頁。もっとも、この感覚は、筆者も含めて現代人のものかもしれないが、この際修行心理の時代差は問題としない。
- 31) 石鎚山に75回も登拝したという西海賢二氏が石鎚山の鎖場に対して持つ感覚は、このような余裕の表われかもしれない。西海賢二「山岳修験研究の在り方——研究と実践のジレンマ」、山岳修験9, 1992, 33—35頁。

[付記]

脱稿後、本山修験宗本庁発行の『本山修験』第116号(1993年1月発行)が届いた。本稿に登場するO氏の奥駈修行記、玉岡氏のエッセイ、林実利行者に関する文章など興味深い内容になっている。なお、同誌17頁の岩場の写真はトサカ尾である(本稿写真22の直前)。

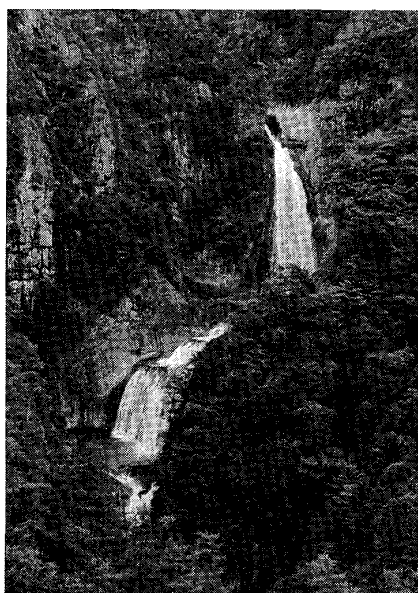


写真1 不動七重滝



写真2 前鬼小仲坊

右上が庫裡。左下はトイレ。左奥に行者堂と宿泊所がある。

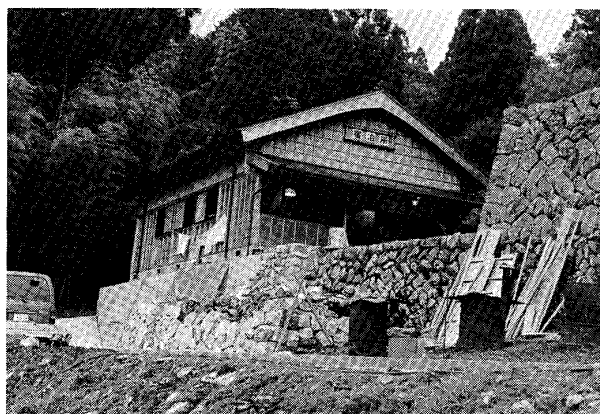


写真3 建て直されたばかりの前鬼宿泊所

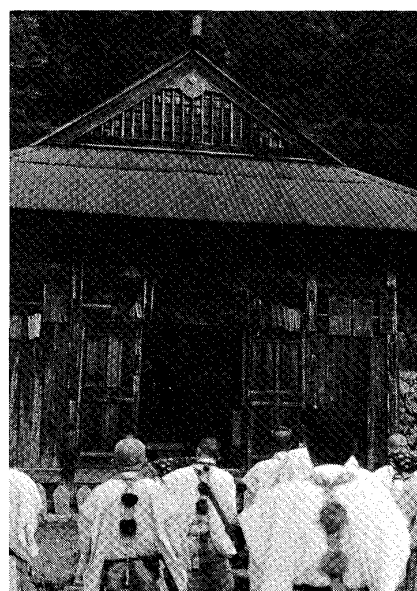


写真4 前鬼行者堂での勤行

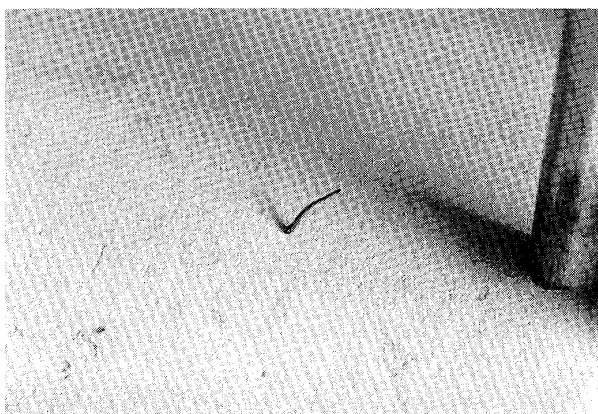


写真5 ヤマビル

右に見えるのは杖。

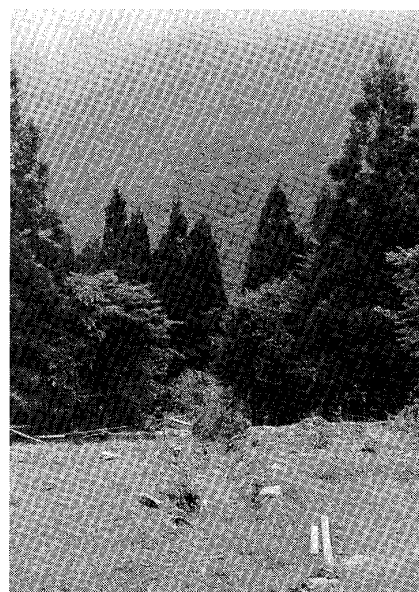


写真6 小仲坊から南東下方を望む

道の両側はかつての耕地。



写真7 斜面下から行者堂方向を望む

行者堂は石堀の後ろ。

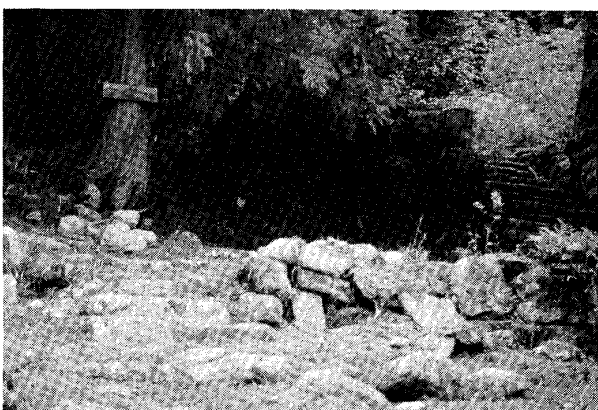


写真8 金輪王寺跡下の三叉路

右に見えるのは行者坊（五鬼熊家）跡への石段。左に曲がると太古辻に続く。



写真9 中之坊（五鬼上家）跡



写真10 太古辻での勤行

北から撮影。



写真11 背比べ石

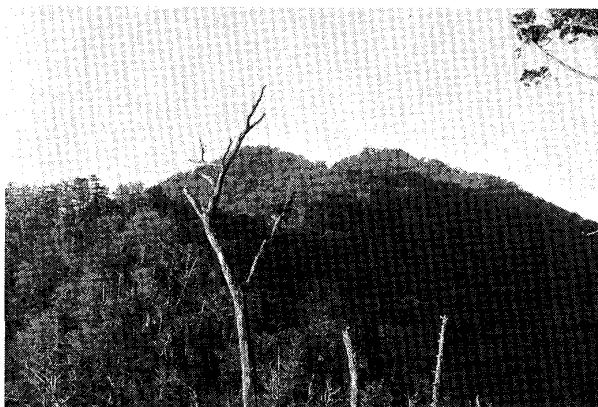


写真12 石楠花岳・天狗山

左手前が石楠花岳。中央奥が天狗山。



写真13 道沿いに群生する石楠花



写真14 孔雀岳・釈迦ヶ岳・大日岳

右奥の尾根が孔雀岳。左の高峰が釈迦ヶ岳。中央の鋭峰が大日岳。その右の鞍部が太古辻。右端は蘇莫岳。孔雀岳下の五百羅漢も一部が見える。



写真15 嫁越峠

右は十津川村花瀬への道。北から撮影。



写真16 笠捨山の遠望

中央奥の鍋を伏せたような山が笠捨山。よく目立つ。右手前は涅槃岳。



写真17 新宮山彦ぐるーぷの刈峰行を示す杭



写真18 「滝川の辻」

右は十津川村花瀬への道。北から撮影。



写真19 剣光門の平坦地

北から撮影。



写真20 剣光門の道標・碑伝

左下に小さく見えるのが剣光童子の石。



写真21 剣光童子の石

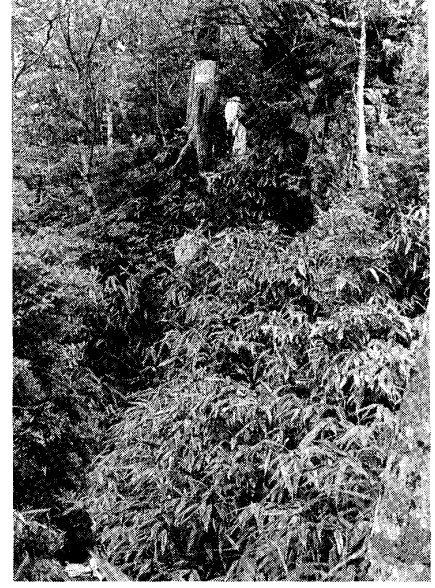


写真22 トサカ尾からの鎖の下り



写真23 持経宿での勤行

左は大宿の中井氏。



写真24 持経宿の金剛童子の石

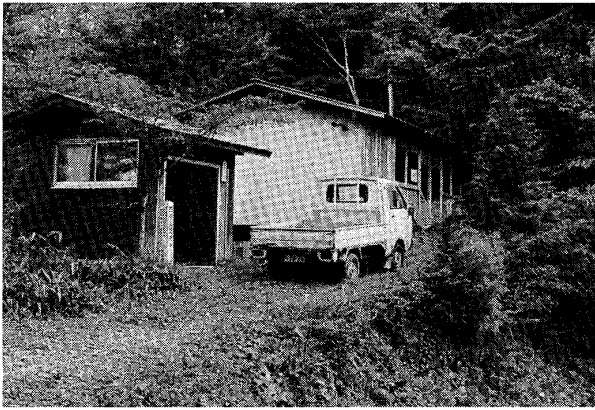


写真25 持経宿小屋（右）と不動堂（左）

写真右奥から左手前に奥駈道が通る。手前の崖下は林道。南東から撮影。



写真26 持経宿南で林道より旧道に戻る

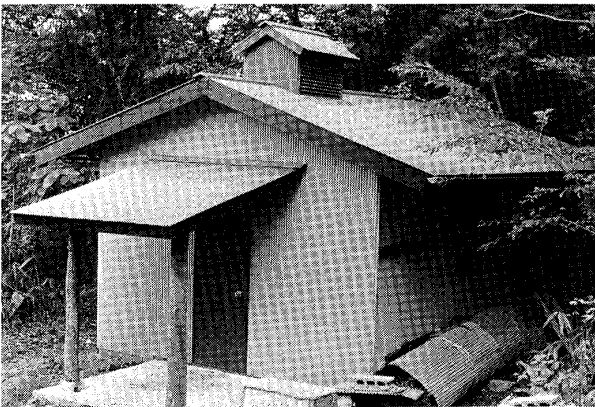


写真27 平地宿小屋

右側を奥駈道が通る。北西から撮影。



写真28 転法輪岳頂上の釈迦説法の座石



写真29 怒田宿の道標・碑伝

木の根元に小さく見えるのが金剛童子の石。



写真30 怒田宿の金剛童子の石



写真31 怒田宿の平坦地

北から撮影。



写真32 行仙宿行者堂

後ろに小屋がある。左側を奥駈道が通る。南西から撮影。



写真33 行仙宿行者堂内

左が役行者。右が林夷利行者。

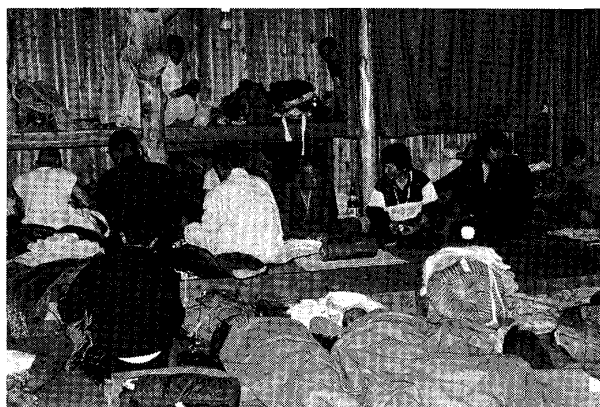


写真34 行仙宿小屋内でくつろぐ奥駈参加者

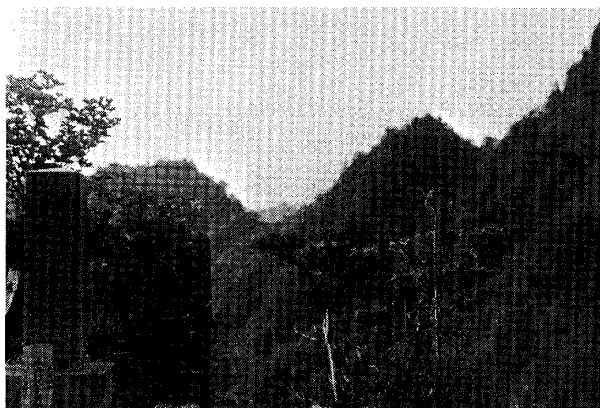


写真35 笠捨山北東麓の「南無八大童子」の石（左手前）

背景は笠捨山の南東支脈（左が1,231mピーク）。



写真36 笠捨山の上り

笹が背丈を越す。



写真37 笠捨山頂上の金剛童子の石



写真38 「槍ヶ嶽」の標石(右下)

右後ろに大岩がある。

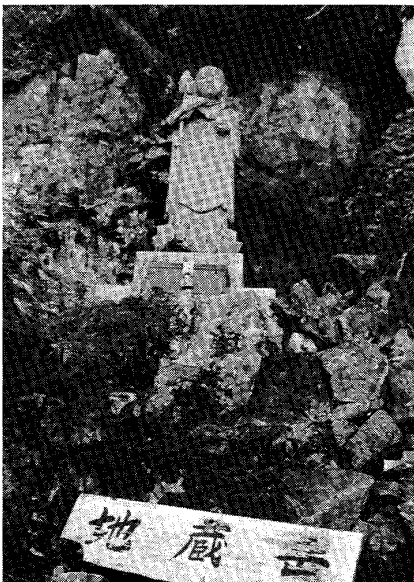


写真39 地藏岳の地藏像



写真40 拝返し

道の脇に標石・標板があるだけである。

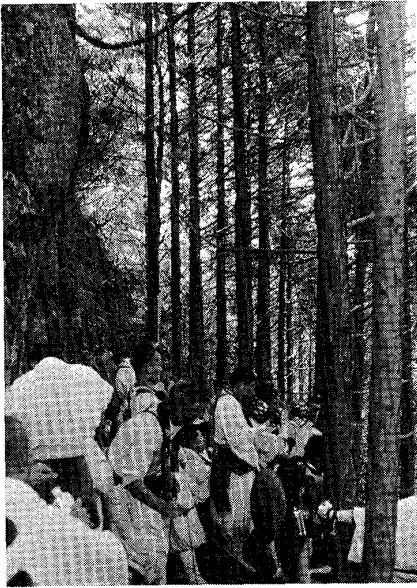


写真41 貝吹野

巨岩を後ろに法螺師が法螺を吹いているところ。

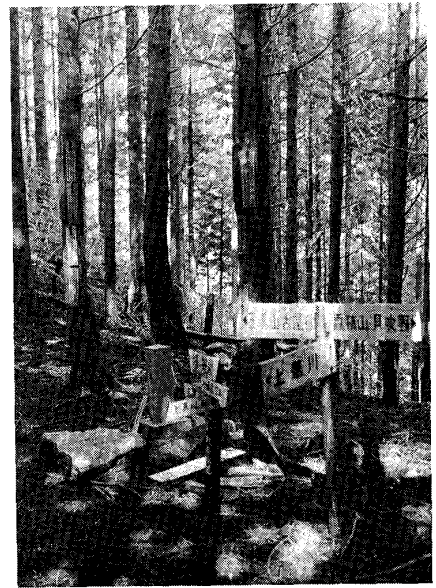


写真42 塔之谷の三叉路



写真43 古屋宿の平坦地

北東から撮影。



写真44 岩ノ口の奇岩



写真45 花折塚

左が片岡八郎の塚。右は記念碑。



写真46 林道より十津川と折立集落を望む



写真47 玉置山頂上

右に見えるのが地藏の祠。左が熊野灘の方向になる。



写真48 三つ石社

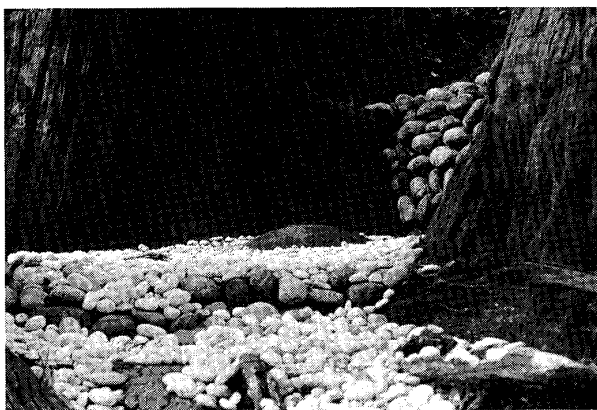


写真49 お玉石

石の上部だけが見えている。



写真50 玉置神社社務所

もと高牟婁院の書院。



写真51 五大尊岳頂上の
不動明王像



写真52 金剛多和の平坦地と役行者の祠



写真53 金剛多和を雨の中出発する

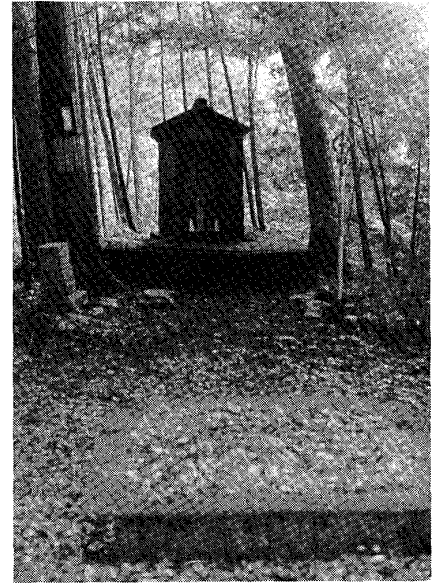


写真54 山在峠(1)

奥に役行者の祠。手前に護摩壇。

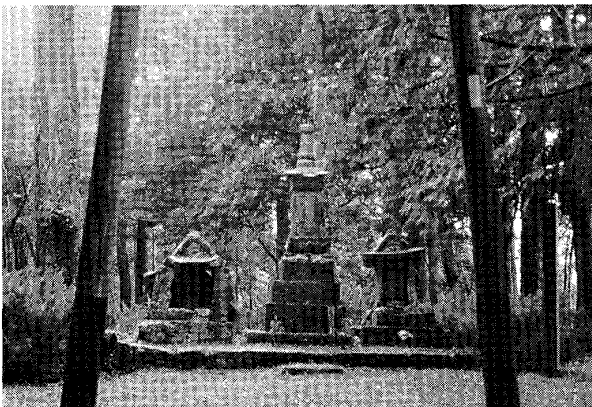


写真55 山在峠(2)

宝篋印塔と石祠。



写真56 吹越宿

奥の堂には役行者と理源大師が祀られている。手前に護摩壇。



写真57 熊野本宮旧社地（中央の森）

左から突き出した山の尾根が備崎。現在の本宮大社社殿は写真のさらに右手になる。

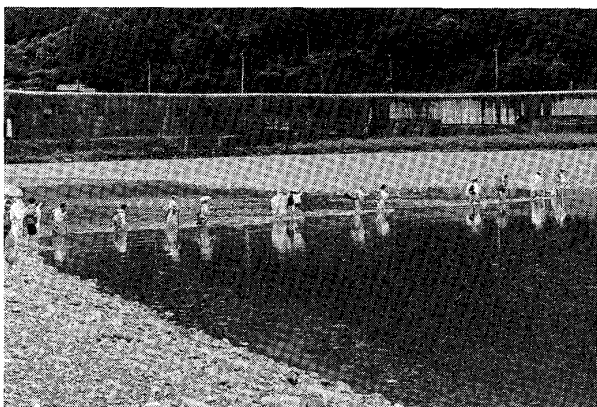


写真58 備崎で十津川を歩いて渡る



写真59 行列隊形で本宮旧社地に向かう



写真60 熊野本宮参拝を終えて